

地球環境対応でもガラパゴス化する我が国の悲劇

内藤 正明 (ないとう まさあき / 認定NPO法人ソーシャルデザインセンター淡路 理事)

●G7サミットを機に顕在化した一例

先日まで開催されていたG7広島サミット(主要7カ国首脳会議)では、地球環境・エネルギー問題についての会合も開かれていた。

それに関して、事前の検討過程で日本から提案していた“日本の誇る脱?炭素ボイラー技術”が、ヨーロッパ諸国から批判を浴びて、結局大幅な条件付きでどうにか盛り込んでもらえることになったというニュースがあった。これは、日本の温暖化対策の背後にある技術、経済、社会のすべてに関わる(悲劇的とも言うべき)深刻な問題点が見事に露呈された出来事である。

そもそも話題の技術は、「ボイラーの燃料にアンモニアを混焼することで、二酸化炭素の発生が抑えられる」という燃焼技術である。

●なぜエセ技術しか出ないのか

案の定、批判を浴びる結果となったようだが、その内容は

- ①そもそもアンモニアを作るのにエネルギーが必要
- ②その混焼では、大気汚染対策が必要

という技術として当然出てくる指摘である。なぜ技術先進国を標榜する我が国が、このような技術を持ち出したのか。この背後には、我が国の政策決定の悲劇的な状況がある。それは一言でいえば、産業界と役所(特に経産省)が一体となった利益共同体の力が、地球環境対策をも支配しているからである。

国内なら、内部の利害対立でコップの中でやり合っても力関係で押し切れるが、地球環境問題ともなると世界との接点が出てく

る。この時、外部の批判に晒されても、その時だけ適当にやり過ごせば生き延びることができる。

今回のも、何とか生き延びさせないと、経産官僚としての面子が立たないので、

『我々は、低炭素及び再生可能エネルギー由来の水素並びにアンモニアなどのその派生物は、摂氏1.5度への道筋と整合する場合、産業及び運輸といった特に排出削減が困難なセクターにおいて、セクター及び産業全体の脱炭素化を進めるための効果的な排出削減ツールとして効果的な場合に、温室効果ガスであるN₂Oと大気汚染物質であるNO_xを回避しつつ、開発・使用されるべきであることを認識する。』

という驚くべき迷文にして文言に残した。これほどの迷文は、最高学府を出てキャリア官僚となった秀才の力である。これに匹敵する歴史に残る迷文は、「第一次環境基本法」の中の「環境税」の条項である。少し長いが、紹介すると、

『第二十二条2 国は、負荷活動を行う者に対し適正かつ公平な経済的な負担を課すことによりその者が自らその負荷活動に係る環境への負荷の低減に努めることとなるように誘導することを目的とする施策が、環境の保全上の支障を防止するための有効性を期待され、国際的にも推奨されていることにかんがみ、その施策に関し、これに係る措置を講じた場合における環境の保全上の支障の防止に係る効果、我が国の経済に与える影響等を適切に調査し及び研究するとともに、その措置を講ずる必要がある場合には、その措置に係る施策を活用して環

境の保全上の支障を防止することについて国民の理解と協力を得るように努めるものとする。この場合において、その措置が地球環境保全のための施策に係るものであるときは、その効果が適切に確保されるようにするため、国際的な連携に配慮するものとする。』

余りの迷文に感激さえする。しかし優秀な頭をこんな「霞が関文学」のために使うのは当人としても良心があれば無念であろうが、これが宮仕えと諦めて出世していく。そして最後は官邸秘書官にまで上り詰める。

国内の専門家も、多くが研究費をもらって経済界・経産省連合のお先棒を担いでいる。大して深い信念もない者を選んで研究費を提供してお墨付き発言をさせる。そんな連中から役立つ成果が出た例はこれまでも皆無に近く、むしろ無残な結果が多い。こうしてガラパゴス化が進行してきたのは、他の多くの分野と同様である。

●経済成長を前提とする限り無理な理由

こと温暖化に対しては、単に産業界が儲かるエセ技術ではどうにもならないことは明らかで、ここまでそれ一辺倒で進めてきた経産省・産業界連合の成果として、何か画期的な「対策技術」なるものが生まれただろうか？「水素社会で解決」などと騒いできたが、水素はどこから湧いて来るわけではない。ソーラー発電など自然エネルギーで水素を作るという、いかにも素人には良さそうに聞こえるが、一旦電気にしたものを別のエネルギーに転換するのが非効率なのは技術の常識である。それでも一理あるとしたら、時間変動の大きい自然エネルギーの貯留手段としての役割である。もし貯留技術として水素が最適というなら、その評価はどこにあるのか？多分、どこかの産業にとってそれが好都合

だったからでは？と勘繰りたくなるが…。そもそも自然エネルギーの賦存量は極端に少ないなどといったエセ情報を使って徹底的に引き摺り下ろしてきた（旧）通産省が、今になってそれで水素社会だとは…。

●真の温暖化対策は

そもそも温暖化は過度の工業化によって引き起こされたものだから、その主犯たる産業界が手控えることなく、さらにその力を使って解決しようとするのは原理的に無理がある。

実は我が国にも、独自の優れた「真の脱温暖化技術」がある。しかしそれが採用されるには、社会・経済からその背景を成す価値観・倫理観までを含んだ「真のエコ社会」への転換が必要である。そうすると政治体制の大変革も必要になる。それはいまの日本では既得権益に立ち向かう茨の道である。

残念ながら、既得権グループが“悪”で、市民グループが“善”であるとする「社会規範（善悪）」はなく、それは専ら個人の「美意識」の問題である。しかし、いま我々が直面している地球環境問題は人間社会の規範を越えて、それを取り巻く「自然の摂理」に従わないと、人類存亡にかかわる。

そう思い定めて既得権益に立ち向かい、「人類の存亡のために」闘う志のある人が必要で、一部若手学者や若手の実践者の出現も見られるが、地球環境の危機状況からすると残念ながら間に合うとは思えない。

ではお前の提案はあるのかと問われたら、『もう避けられない危機なら止めようとあがくのではなく、「救命ボート」を作ってせめて自分達だけでも生き延びる（mitigation ⇒ adaptation）』というものである。

もう人類はそこまで追い詰められている。グレタさんが代表する次世代には、謝っても謝り切れない。